

第5回 奈良県立高等学校入学者選抜検討委員会 議事要録

1 日時 令和4年8月29日(月)10時～12時

2 場所 奈良県庁 東棟2階 教育委員室

3 出席者(敬称略)

京都大学特任教授	小松 郁夫
奈良教育大学教授	赤沢 早人
県議会文教くらし委員会委員長	田尻 匠
県都市教育長協議会会長	上田 陽一
児童生徒保護者代表	工藤 将之
県高等学校長協会会長	栢木 正樹
県中学校長会会長	熨斗 慎司
県小学校長会会長	鍵本 光弘

(※ 委員欠席1名)

県教育委員会教育長 吉田 育弘
他、県教育委員会事務局職員 5名

4 概要

(1)開会

- ・前回の会議では、調査書の取扱いの見直しや、入試の特色を維持しながら一本化することにつながる議論をしていただいた。生徒の進路選択をしっかりと保障し、「高校へ行くこと」が目的ではなくて「高校で何を学ぶのか」ということを適正化自体が目的にしているので、その目的が叶うような入試の在り方を、具体的に検討していただいている。
- ・中間まとめの公表に向けて、これまでの論点整理を行いたいと考えているので、忌憚ないご意見をお願いしたい。

(2)協議

○事務局より<資料に基づき説明>

○委員より<主な意見>

- ・高等学校では、中期計画を立てて、学校の特色を積極的に打ち出そうとしているが、なかなかわかりにくいところもあるように思う。しっかりと特色をアピールして受検の倍率の低下を防げればと考えている。
- ・中学生が、行きたい学校を選ぶことはかなり定着してきている。
- ・保護者からは普通科をもっと増やして欲しいというような意見がある。学校紹介としてのeオープンスクールが、少しわかりにくいという意見が多く、受検に保護者がついていないという現状がある。

・特に最近、特色選抜の出願が少なくなってきた。第1、第2の希望の制度も定員割れの改善策の1つだと思うが、実業コースと普通科とを第1、第2とできるようにするといったことでも違いが出てくると思うので、検討が必要であるとする。

・小学校から、県外の中高一貫の中学校に進学する子どもたちがいるという事実がある。やはり高校卒業までは、奈良県で子どもたちを育てたいという思いを大事にすべきである。

・私学に比べると設備等が古くなっており、生徒が選ぶときにそういう点で非常に厳しい現状である。子どもの感性にも少し踏み込んで考える必要がある。

・県立高校入試の課題点を中間まとめで明確に示す必要がある。どの課題に今回の改革で着手するのかということについて明確に示す方がいい。入試はある意味、策を練るほど複雑化して身動きがとれなくなるためできるだけシンプルにして、高校改革で行きたい高校を創り、県外の私立より県内の高校に行ったほうが生徒にとって良いという方向に持っていくのがよい。

・私立高校の実質無償化によって、公立高校として高校教育を保障する意味合いが随分変わった。本質の魅力づくりは教育の中身、カリキュラムの中身である。中学生、保護者、中学校の先生たちにわかりやすい特色を教育課程として作っていく必要がある。

・これ以上選抜が増えると入試業務が煩雑化する。今までのように特色と一般とを分けるのが難しいのであれば、一本化すればよい。実業系は特色、普通科は一般と私学となっているため保護者も納得するのではないか。

・専門学科は受検時期を早くすることで大切にしてきた。国も専門学科を大切していく流れの中、普通科が第1希望のとき、第2希望を専門学科を中心として書くことは、特色選抜と一般選抜の流れを踏まえると自然と考える。普通科で第1希望、第2希望とすると普通科の序列化になり、中学校でどのような進路指導になるかが心配される。

・特に中南部の地域では子供たちが減っていく中、地域に残ってほしいので、地域の学校を受検できる機会を設けてほしい。

・高校の立場としては、入試の一本化はありがたい。入試を実施している間学校は止まってしまう。教職員も緊張感を持って入試をしているので、1回になれば教職員の負担も減る。

・データとしては1つとして、それを学力検査と調査書の比重や学力検査なら教科の比重のかけ方を変えるなどの工夫はできると思う。きっちりと責任をもって実施するには、入試の回数は減らすのがよいのではないかと思う。リスクも減るし、高校の負担も減るし、受検生にとってもわかりやすい。

・定員割れになった学校では二次募集も実施する必要があると思うので、第1希望と第2希望に加え二次募集もあることで複数回の機会があるとする。

・入試の回数について、これに正解はない。奈良県教育委員会がこのようにすると決めればよいとする。

・保護者は高校の卒業後も気になるので、例えば王寺工業に進学コースを設けるなど、進学の部分を何とかすれば専門高校へ行く生徒もいるのではないか。将来の就職や進学などいろいろな選択ができるようにする必要もあるのではないか。

・少子化の時代は、競争をさせる選抜ではなく、一人一人の生徒が納得をして入学するような選抜にする必要がある。例えば自分の得意な英語を3倍にするなど、調査書の点数を

どのようにするかを受検生が選べるようなことができれば、納得感は出やすい。今回の入試改革では難しいが、今後の方向性で考えてもらえれば。

・観点別評価の、特に主体的に学習に取り組む態度は、学習指導要領に書いてある中身と、現場での受け止めで随分乖離がある。そこを見取るのは現状厳しいのでは。面接やパフォーマンステストを入試の一つとする等、生徒達が主体性を発揮している場面を設定して点数化することになるか。

・入試で大事なものは公平性だとすると、観点別評価を用いるのはなかなか難しい。1学年10人くらいしかいない学校だと一人一人丁寧に見られるが、35人で同じようにきめ細かく評価できるだろうか。せっかくのねらいだから本当は選抜に活用できないかと思うが。

・ICTを入試で活用できればと思う。マークシートやソフトを使って採点する等、採点システムに関して進めてもらいたい。

・CBTを入れるという方向性を示さないと、小中ともに動かないと思う。タブレットの活用について、他の市町村との差があるという保護者からの意見もある。Web出願に関しては、このご時世なので、ぜひお願いしたい。

・普通科以外を選んで欲しいということに対して、中学校で情報発信してほしい。中学生はSNSを活用したTikTokなどの動画を見ることが多い。そういうところで学校紹介をするような仕組みが作れたら面白いのではないか。

・全ての学校で、ICTが活用できる環境が整備されているかどうかを確認いただきたい。デジタル学習を整備して、みんな一緒にスタートできる、そんな奈良県であってほしい。

○委員長まとめ

・高校の本質の魅力づくりは教育の中身、カリキュラムの中身だと考える。それが世間一般からうまく見えにくい。わかりやすい特色、キャッチフレーズ等を教育課程としてしっかり作っていく必要があるのではないか。大きな高校改革の中で吟味して欲しい。

・地元の学校を存続させるために「地元の学校を受検するならば優先枠がある」とするときには、残った枠に他の地域からどれだけ受検生を集められるか、魅力づくりをどれだけ学校ができるかを考えなければならないのではないか。

・制度改革をもしするのであれば、基本的には混乱させないように、わかりやすいものにしていくこと、受検生が理解をして納得をするということ、一人一人の生徒にふさわしい形で進路指導のしやすいシステム、高校が目指す教育を生徒が理解し魅力を感じられるものに、これらのキーワードを大切にしながらもう少し議論したい。

・新しい時代に合わせてどういう学校であるべきかについては、私たちの議論も参考にさせていただきながら、新しい組織の中でしっかりと議論をしていただきたい。

(3)閉会

○事務局より

・今後について事務連絡